

# 病魔 何するもの

1975.8.28  
毎 夕刊

【京都】ヒロシマ、ナカサキの惨劇を生み、さし平和への願ひにもかかわらず、巨大なぐれ上がる恐怖の核兵器陰謀—二十八日、国立京都国際会館で始まったバグウォッシュ・シンポ。その開会式、病魔と闘いながら怪物に不屈の闘いを挑む湯川秀樹・京大名誉教授の心は「核兵器はわれわれの共通の敵。地球上から核兵器を絶滅することがわれわれの目標に力をめて、全世界に訴えた。もう三十年も続く核時代が、決して未来までへ続くのではなく、人間の努力によって全く違った、次の時代を、つくり出せる—この強い信念が病身であることを忘れさせていた。



車イスでバグウォッシュ・シンポ会場に入る湯川秀樹博士とスミ夫人 (28日午前9時15分)

## 湯川さん平和への訴え

### バグウォッシュ・シンポ

純き、五月二十六日入院。六月二日、同病院菅沢太郎・泌尿器科部長の執刀で前立腺の摘出手術を受けた。一時経過は順調だったが、その後肥大した前立腺がガン化していたといわれ、七月に入って転移を防ぐための二回目の手術を受けた。

ラッセル・アインシュタイン宣言(一九五五年)に真ッ先に署名し、十八年前カナダのバグウォッシュ村で始まった同大会に参加して以来、核兵器の廃絶を訴え続けてきた湯川さん。激しい痛みと授けられた不自由な生活だったが、心にかかるのは京都シンポジウムのことばかり。まぐれに置いたノートはいつの間にか平和を求めの言葉で埋まっていた。

今日十八日、湯川さんは退院した。体はまだまだ回復してはいないが、開会とあいさつの原稿をまとめてあげたためだった。体力をつけるため食事を無理やり口に入れることもよくありました、とスミ夫人は言う。

とつとつとした英語で語りかける湯川さんの小柄な体は巨大な怪物・核兵器に真正面から立ち向か

って一歩も引かなかった。湯川さんの話は約五分間。が話終わると参加者の間から拍手が起きた。ロートブラット・ロンドン大教授が湯川さんをねぎらって会議への決意を述べた。ここではじめて湯川さんの顔に笑みが漏れた。

開会式のおと、P・フアラウ博士(オーストリア・経済学)は「湯川博士のスピーチは人類への責任感にあふれた感動的なものだった」と語っていた。

092-17-034